

岡崎久彦・長谷川三千子著「激論 日本の民主主義に将来はあるか」海竜社 2012年6月26日刊  
を読む

## 国益にかなう国家運営のためには、優秀な官僚の存在が不可欠

岡崎久彦：ところで、ロベスピエールのように、立法府がそのまま政府になったら独裁しかない。  
それがその頃の考え方ですが、いまの日本は立法府が事実上の政府ですよ。国会で多数  
を占めた政党が内閣を組織するわけですから。

長谷川三千子：本来ならば立憲君主制でもって国全体の形がしっかり固まるはずのところ、それ  
が崩れてしまったので、ただ首相がころころ変わるだけの政治になってしまっていま  
すね。

岡崎：(1)問題は行政府です。シュタインは、行政府は国王から独立しなければならない、国王  
が行政府に介入して勝手に官吏の首を切ったりしてはいけないと言っています。今は、  
立法と行政が混然として一体になっていますが、三権分立の思想、ひいては行政の独立  
の思想は厳存していました。

(2)これが何を意味するかというと、独立した官僚組織の存在が不可欠だということです。  
その際、官吏に責任感をもたせるには、当然、権限をもたせる必要があります。官吏は  
公務だけでなく、私的、社会的な全ての活動において、責任ある行動をとらなければなら  
ない。そうすると、しかるべき教養および道徳上の資格が必要になるでしょう。少な  
くとも官吏は、歴史と哲学について十分な知識をもっているべきで、その歴史と哲学の  
知識によって、権力とは何か、国家の運命とは何かについての見識をもつことになるわ  
けです。要するに高級官僚制度ですね。国王も動かせない、立法府も動かせない、そう  
いう官僚制度を作って、三権分立をやればよいという理論です。

(3)それは徳川時代、教養と使命感のある士大夫による政治を知っていた日本人にとっ  
ては馴染みやすい議論でした。

長谷川：あ、それは重要な観点だと思います。いまの日本で「民主主義」を信奉する人の多くが  
官僚を敵視して、「政治主導」とか、「官から民へ」ということをとなえます。要するに  
選挙で選ばれていない人間たちに力を持たせるのはけしからん、ということです。しか  
し、国益にかなった国家運営のために、優秀な官僚たちの存在は不可欠ですよ。必要  
なのは官僚バッシングではなく、本当によい官僚を育てることだ、と私もつくづく思  
います。まァ、昨今の日銀のような、完全に国家の経済運営—経世済民—の視点を失  
った、「立法府も動かせない」官僚は困りものだと思いますが(笑)。

岡崎：(1)その「立法府も動かせない」官僚が必要だと思うのです。

(2)一番初めの問題意識にもどって、どうしても遠心力が働いてしまう民主主義でどう  
やって国の安全が守れるかということです。

(3)私はそのためには官僚制度が必要と思っています。

(4)最近、新党ブームで、大阪維新の会とか、みんなの党とか、結構票を集めています  
ね。しかし、これらの党の共通の問題点は、国家の安全保障についての定見を明らか  
にしないことです。それについては何も言っていない、むしろなまじっか言わない  
方がよい。無理して言おうとすると、他によって立つ所が無いので、偏向教育で  
覚えたことを自分の意見のように言うだけになってしまう。

- (5)それは無理もないことで、一般の民衆が普段考えていることは、毎日の生活、住宅、物価、景気、医療、子弟の教育、そして、長期的な問題となると、社会保障、年金などです。戦争が近くに迫っていない限りは、国家の安全など考えていないからです。
- (6)中央官庁の官僚というのは、国家的にものを考えざるを得ない。特に外交と防衛に関する官僚はそればかりを考える。故下田武三次官は常々言っていました。外交官は退職後、ツブシはきかない。でも、定年まで大使を務めるのだから、やめたら目刺しを食って暮らす覚悟でお国のことだけ考えろ。将来のことなど考えてウロチョロするな、と。
- (7)私は常々官僚に言ってきました。役人の月給は安いかもしれないが、国家的にものを考えていればよいというのは、一般国民にない特権だと思って、それを以て<sup>めい</sup>瞑すべきだ、と。民間だとまず第一に自分の会社のことを考えなければなりませんから、四六時中お国のことだけ考えられるのは特権です。

長谷川： それはまさに至言だと思います。それこそが本当の意味での役人の「特権」ですね！

岡崎：(1)私は、外務省の局長の頃は、「外務省のため」と言ったら横を向いて返事をしませんでした。それでも言うのならば「無理にこじつけてもお国のためと言ってくれ」と言いました。防衛庁に居た時も「肩に星をつけたら(将官になったら)、陸、海、空のためというせりふは言ってほしくない」と言ってきました。

(2)社会にはお国のためだけ考えている人々も必要と思います。

(3)戦後日本は軍人を大事にしなくなった。これは、四六時中、国の安全だけを考える貴重な役割を持つ人々を失うということになります。

(4)やはり、ちゃんとした試験をして優秀な人物を集めて、そこから、官僚、特に外交官と軍人を育てておかないと、いざという時に、あたりを見回しても、国家的に考える訓練を受けた人がいなくなります。

長谷川： まさにおっしゃる通りですね。「国家的に考える」ことのできる官僚を、すべての省庁において育てていかなければなりません。

P210 ~ 215

#### [コメント]

私の尊敬する外交官であられた岡崎久彦先生と民主主義の研究者 長谷川三千子先生の日本の近現代史の本質に迫る対談。大日本帝国憲法と日本国憲法の各条項の背景にある歴史を理解することで、これからの日本のありようが浮かび上がってくる。日本国民必読の書。

— 2012年9月10日 林 明夫記 —